



まっすぐすむこと



石橋 綾菜 (いしばし あやな)
東京理科大学 理工学部 建築学科



起きる、食事する、散歩する、友人と話す、本を読む…
生活は時間とともに途切れることなくまっすぐつながっている
これをそのまま都市に落とし込んでみる
図書館も、美術館も、officeも、まっすぐなみち
「まっすぐすむこと」で生活は流動的につながり、みちは都市のリビングになる

茨城県つくば市
筑波研究学園都市として建設された土地で公務員宿舎が建ち並ぶ
建設されて半世紀、計画的に張り巡らされているペDESTリアンデッキは、生い茂った樹木で暗く人通りの少ない寂しい街路となった
ここでは、建物の中と外で生活がはっきり分断され、ペDESTリアンはただ目的地に向かうための動線に過ぎず、生活がみちまで出てこない
そこでこのペDESTリアンにもっと人が溢れ、新たなアクティビティが生まれる場にしたかった
既存のペDESTリアンと公務員宿舎は残したまま、新たなプログラムを挿入する
これらのみちができることで、いままで平凡だった「移動する」という行為が色づき始め、目的と目的の間に新たなアクティビティが生まれる

講評

方向性や動きを感じさせる「まっすぐ」と、一所に留まる意味合いの「すむ」を組み合わせたタイトルの妙に、都市への想いが込められている。行き来するだけの日常動線に、多様であるべき「すむ」要素を絡めていく、都市の住まい方を再構築する提案である。

地上面は車、人はペDESTリアンデッキを歩く単純な都市計画（階層分離）の考え方を撤廃するのではなく、公共性の違いに配慮しながら複数の機能を立体的に付加する。それにより地上を歩く楽しみ、アップダウンのある多彩なシークエンスなどを生み出し、新しい出会いや発見の期待感あふれる都市空間を獲得しようとしている。

日常動線にあるからこそ、自分の「リビング」や「庭」の延長に思え、プライバシーとパブリックの心理的な境界を自らの意志で調整できる「すみやすさ」につながる。このアイデアの発展に期待したい。

(審査委員：柳瀬 寛夫)

